

クリエイティブ・ドキュメンタリー映画
『円明院－95才の女僧によれば』

瀬戸内の造船の町とともに生きた老尼僧の人生の物語

オリジナル（英語）題：The Gatekeeper of Enmyoin : According to a 95-year-old Female Buddhist Priest
邦題：『円明院～95才の女僧によれば』

共同制作／共同監督 タハラレイコ&上杉幸三マックス
制作：エムレックス・プロダクションズ MReX Productions
ホームページ：<http://mrex.org>（プレス・リリース、画像ファイル他）
住所：621 Baltic Street #2, Brooklyn, NY 11217, USA
電話/Fax：(718)399-7092
メール：代表 info@mrex.org

◆ 映画仕様

カラー&白黒、ステレオ、比率4：3
英語／日本語（英語字幕）、（英語部分に日本語字幕を加えたバイリンガル字幕版もあり）
完成年月日；2008年8月（124分バージョン、ディレクターズ・カット）、2007年10月（ハワイ国際映画祭158分バージョン）
撮影フォーマット：DV、16ミリ映画、8ミリ映画
収録地／岡山、東京、高野山、奈良東大寺、ニューヨーク、ブルックリン
上映フォーマット：DigiBeta、DVD（又はHDCAM）

◆ 上映記録

2009.11/28&11/29：岡山映画祭／岡山映像祭（岡山市デジタルミュージアム、日本初公開）
2009.10/01：テンプル大学（フィラデルフィア、アメリカ）
2009.9月：一か月間 ハワイ州タイムワナー・ケーブル特別オン・ダイヤモンド無料キャンペーン、（ハワイ国際映画祭のプロモの一環として）
2008.09/30～10/02（124分バージョン初公開）、ヴィルセック財団ギャラリーこけら落としイベント、満員御礼上映、ニューヨーク（マンハッタン・アッパーイーストサイド）
2008.03.28（2時間バージョン／ワーク・イン・プログレス）、ニュースクール大学、ニューヨーク
2007.10/21-28（158分バージョン）ハワイ国際映画祭、ホノルル 世界初公開 3回上映

◆ 内容要約（短）

香川（飯山町）の農家から7歳で寺に里子に出され、18歳で単身四国から瀬戸内海を渡り、造船の町・宇野の歴史とともに歩みながら真言宗寺院・円明院を建立した老尼僧、故小川貞純（おじゅっさん）。男性優位の地方真言仏教界でただ一人、彼女はどんな思いで女性として僧侶として生きたのか。玉野市を故郷に持ちニューヨークで活動するタハラレイコ・上杉幸三マックス共同監督が、夢を追って海を渡った自分達の歴史をおじゅっさんの人生に重ねながら、彼女の思いと女性にとっての幸せや独立の意味を9年の歳月をかけて探し続けた渾身の作。

◆ 内容要約（中）

真言宗円明院住職の小川貞純は、ニューヨークに住む日本人映画制作者夫婦に彼女の人生を語り、95歳で亡くなった。7才でお寺に里子に出されたこと、円明院というお寺を自身の手で建立したこと...ただ、女性として生きてきた思いは、まるでタブーであるかのように語りたがらなかった。

その後、若い尼僧がその寺を継いだ事を聞き、夫婦は亡き老僧・貞純に導かれた様な気持ちで再び円明院を訪れた。貞純の生前・死後にかけて、語られなかった彼女のオンナの気持ちを探し求めた旅の中から、映画『円明院』は生まれた。

貞純の尼僧として生きてきた厳しい現実が露呈する一方で、彼女の人生の“語られなかった部分”から新たな謎が浮上する。物語は妻レイコの声で語られる。その中に、アメリカに移住している日本人女性、妻、また母として、自由とバランスへの鍵を貞純の人生の中に探す制作者のもう一つの旅が混在する。そうして、初めはシンプルで未完成だった尼僧・貞純のポートレートは、男性中心の日本の地方仏教界で生きる女性僧侶の生き様を映し出しながら、物語性と精神性豊かなジャンルを超えた私的探偵ドキュメンタリーへと変貌してゆく。

◆ リビュー

アラン・ベルリナー 映像作家（NY映画祭、サンダンス映画祭等出品・入賞多数）

“ある意味ポートレート、ある意味探偵小説、ある意味文化・宗教思索、そしてある意味瞑想的自己探求の旅...95才の女性住職、小川貞純の過ごした独自の時、人生、またそのレガシー（次世代への遺産）と、家族と共にアメリカに暮らす日本人女性映像作家タハラレイコの頑固一徹に放浪する好奇心、その二つが深く共鳴しながら繋がり、一本の糸が紡がれていくところに、映画『円明院』の面白さがある。レイコの妙に聞かせる、だが繊細な語り、円明院という寺の精神世界に併存する簡素性と複雑性の両者を見い出して行く。ミステリー、不思議なニュアンス、慈愛、そして深い畏敬の念が、共同監督のマックス作曲による素晴らしい音楽と共に綴られたこの映画『円明院』は、長年僕が見た中でも最も創造力に富んだ手法、語り口のドキュメンタリーの一つだ。”

デオドラ・ボイル ドキュメンタリー史研究者／評論家／大学教授

”この長編実験映画を通して見えてくるのは、日本仏教の現実と女性のあり方についてのある非凡な洞察である。それにも増して、1つの伝記物語がムラカミ小説に値するほどの紆余曲折を経て、次第にサスペンスに満ちたミステリーへと変容していくのが面白い。映画『円明院』は幅広いオーディエンス、日本文化、女性学、宗教学、文化学の専門家から、回顧録や伝記、実験映画の愛好家まで、を魅了するだろう。しかしこの作品について最も特筆すべきは、作家の感性を味わいたい、という程度の期待で見始めた聴衆の度肝を抜く、その楽しい裏切りの仕組みであろう。”

◆ 制作資金協力

日米友好基金 The Japan-U.S. Friendship Commission

全米芸術基金 The National Endowment for the Art (NEA)

ジェローム財団芸術家援助基金 The Jerome Foundation Emerging Artist Fellowship

ニューヨーク州芸術評議会 個人アーティスト支援プログラム

The New York State Council on the Arts (NYSCA) Individual Artist Program

ニューヨーク州芸術評議会 地方分散化プログラム（ブルックリン芸術評議会管轄）

The Decentralization Program of NYSCA administrated by the Brooklyn Arts Council (BAC)

ニューヨーク市文化／芸術部 ニューヨーク首都圏芸術開発基金（ブルックリン芸術評議会管轄）

The Greater New York Arts Development Fund of the New York City Department of Cultural Affairs
administrated by BAC

アジアン・アメリカン・メディア協会（アメリカ公共放送協会後援メディア基金プログラム）

The Center for Asian American Media (CAAM) with funding provided by the Corporation for Public
Broadcasting

個人の方からの寄付金

◆ 制作者の言葉

タハラレイコ 共同監督／脚本／編集／撮影

この映画を完成するのに9年かかった（！）。その間私たちはニューヨークで子供を育て、2回引越し、やっと生活を支え、ワールド・トレードセンターの粉塵のおいを嗅ぎ、戦争について考え込み、マックスのお母さんは逝ってしまわれた。生活しながら映画を仕上げるとことは私たちにとって挑戦であり希望でもあった。自分たちの限界を知りつつ、でも可能性だけを見て一歩ずつ進んだ。今、娘はここブルックリンで元気に育っているし、つつましい暮らしにも慣れたし、そうして出来上がった作品には私達の家族としての最初の十年間のエッセンスが詰まった。

最初は欧米テレビ向けに貞純さんの簡単なポートレイトを作ろうという試みだった。でも彼女の他界後、彼女の閉じ込められた感情を探し求めてたら、最後には風変わりな探偵物語のドキュメンタリーになった。振り返ってみると貞純さんが亡くなったから映画ができたとも言える。彼女が生きていたらきっと許さなかったことも探った。だけど妙なことに、貞純さん自身が、私たちを使ってこの映画をこういう形にさせたような気もしてならない。その過程で、数人の出演者の方々を傷つけ、自分もその結果傷ついた。それが目的じゃなかったから。でも、人生砂糖菓子ではありえない。少なくとも、おじゅっさんの人生は長くシンドク、それを伝えるのが私たちの役目。その分、映画も長く複雑で“見やすい映画”ではないかもしれないけど、そんなおじゅっさんの生き方が観る人の心を揺さぶり長い残像を与えてくれると信じている。そして彼らがそれぞれの幸せを考える一瞬に、ふと思い出してもらえたら、と思う。私は今でも月を見る度におじゅっさんのことを考え、元気をもらい、手を合わせる。

なぜ映画を作るのか？それは今のところ、なぜ生きているのかという問いのようでもあり、生きてどうするのかという問いのようでもある。自分とまわり、すぐ身の回りのコミュニティとのつながり（例えば日本の親戚だったり、15年来の映画仲間だったり、向かいのコミュニティガーデンのメンバーだったり、娘の学校の親たちだったり）、あるいはもっと遠いコミュニティとのつながり（日本人であるとはどういう意味、アジア系アメリカ人であるとはどういう意味、リサイクルは本当に地球を救うの、など）、自分と他者とのつながりを描くことが、自分なりの「歴史」を書き残すことと信じる。そしてそれが集まって、私のような小さな人間がその自分を少しは大切に主観的な「歴史」を書き残すことが、次の世代へ残してあげられるものじゃないか、という気がしている。今までに、小説や映画で沢山そんな歴史に触れ、勇気をもらって生きて来た。同じように私も、他人行儀な「歴史」に、人と繋がりたい気持ちやもっと幸せになってほしい気持ちを込めて残せたら、と願う。

今回は、女性の視点からのストーリー・テリング、という手法上、パートナーのマックスが私を信じてメッセージに関しては好きにやらせてくれた。むしろ、ここが上手く伝わっていないよという風に、絶えず最も理解ある（そして辛辣な）アドバイスをくれつつ、それに絡む形で音楽・音を創って話をひっぱっていつてくれた。ありがたいことだったと心から感謝している。

◆ 制作者の言葉

上杉幸三マックス 共同監督／撮影／音楽／サウンド・デザイン

日本での2回目の撮影の後、映画全体の構成と音楽のテーマをいくつか考え始めた。でも最初に思いついたこの映画の音楽的アイデアはお経を聞きながら撮影していた時に既にあった。

この映画の前には人の映画作品に音楽をつけていた、が、いろんな不満が募りどうしても自分の映画に音楽をつけたかった。自分が監督であり撮影者であることで、現場で感じる感覚や作品全体の構成を考える時点で自由に”映画音楽”に取り組んでみたかった。自分自身の一次的な制作体験を音楽的ストーリーとして表現する—第三者として仮編集を観た後に画面の前で感じる感覚ではなく—この考えは素晴らしい！ハズ、だった。

ただ、その時には来るべき問題はまだ見えてなかった。そしてそのことは実際にしばしばおこった。

作曲家（自分）の理想や都合により編集者（レイコ）に編集の手直しを要求し、しかも最終的には監督（レイコと自分）から了解を得る・・・作曲家にこれだけの自由が与えられるこのシナリオというのは、一般的な編集過程の優先順位からすると普通ではない、あってもごく稀、である。だがそれがやりたいが為に自分の作品に音楽をつけたかったわけで、その逆転した関係のために、作曲者は独自の音楽的物語を構築する事が出来た。しかし皮肉なことに、作曲者にとってと監督にとってのベストはしばしば相容れないため、レイコとの間はもちろん、監督と作曲者としての自分の中で一つの合意に達するまでにとってもとても時間がかかる事がしばしばあった。（中にはとうとう最後まで合意に達する事なきものもあった）

このようにして幾つかの音楽的テーマ・メロディを混合させたり独立させたりして映画全体の中にちりばめた。貞純さんのテーマ、自分達のテーマ、仏教のテーマ、親のテーマ、など。しかし最初からこの映画の中心音楽は既に映画の中に存在していた。お経である。いろんなお経。だから私の作った音楽は私なりの物語伝承の一つの手段にすぎない—もちろん、単に聴衆に感情移入を促すというおせっかいなムード助長用の下敷きのつもりではなく。会話の中やナレーションを縫うように、同じテーマを時には違うテンポで、違う色で。耳に入る個々の色んなテーマをたどっていく事でオーディエンスの人達にレイコの言葉でのストーリーテリングと、自分の音楽でのストーリーテリングとを並行して楽しんでもらえたらと思う。もし2回目に観てよく聴いてたら何か新しい発見（発聞？）があるかも。

確かにこの映画『円明院』は主人公の貞純さんについての映画でありその跡継ぎの清純さん、そして彼女達を取り巻く仏教文化についての映画である。しかしこの映画はMREXの目を通して見た事によって存在している。その見方というのは日本で形作られニューヨークで養われた見方である。この映画は日本で作られたものではない。かといって外国人が作ったものでもない。日本の“外”に住む日本人が作った作品である。結局のところは一元的なある一つの文化観の見方を超えたところで観て聞いて判断してもらいたい。

◆ 制作者略歴

タハラレイコ

東京、吉祥寺出身。子供の頃から文章を書くのが好きだったのが自然に映画作りにつながった。1991年渡米後、日本における西洋のイメージについて思索したドキュメンタリー短編映画『レムナンツ 残片』が30以上の映画祭やアートセンターで上映。マーガレット・ミード映画祭、SXSW（サウス・バイ・サウスウエスト）映画祭、ウーマン・イン・ザ・ディレクターズ・チェア映画祭、ニューヨーク・アジア・アメリカン映画祭、ジャパン・ソサエティ他。1994年から映画音楽／制作者マックス上杉と共同で制作活動が続いている。

2007-08年度文化庁新進芸術家海外研修フェロー。2007年よりニュースクール大学（ニューヨーク）メディア学部修士課程でドキュメンタリー史を教え、また2009年からはテンブル大学（フィラデルフィア）非常勤講師。映画制作と教職の傍ら“思い出ビデオ”の制作、“家族ビデオ”のアーカイブなど、地域の人々にビデオ・サービスを提供するご近所のビデオ屋さんでもある。

早稲田大学文学部第一文学科卒、イリノイ大学ジャーナリズム学部一年在学（ジャパン・イリノイ・クラブ奨学生）、ニュースクール・フォー・ソーシャル・リサーチ大学院メディア学科卒。

上杉幸三マックス

岡山県玉野市宇野出身。大阪桃山学院大学卒業後アメリカ渡米前は大阪でマニアのための輸入レコード店／ライブハウスのマネージャーを務めながらバンド活動を続け、地元岡山でラジオ番組『スイート・ソウル・ミュージック』をホストしたりした。ニューヨークでメディアの音作りや映画音楽理論を学ぶためニュースクール大学院メディア学科へ入学する。

大学院時代にはオルタナティブ・メディア理論を学び、映画音楽からラジオ・ポर्टレートまで多岐に渡る分野で、コミュニケーション手段としての“音”の創作に励んだ。この頃、色々なジャンルの自主制作映画十数本に楽曲を提供。1996年にニューヨークFM放送局WBAIで放送されたラジオエッセイ3部作『サウンド・オブ・リアリティ』では、詩的にかつユーモラスにデジタル再生時代の中での“聞く”ことと“聞こえる”ことへの意識の違いを問いかけた。

一方では映像分野にも興味をのぼし、自身で映画やビデオを撮り始め、自作の音楽／音を映像と融合させた総合的なメディア制作をめざして1994年にパートナーのレイコとエムレックス・プロダクションズを設立、独自の作品をプロデュースし始める。

自分の作品制作の傍ら、テレビ／ドキュメンタリーの制作現場でサウンド／ビデオ技術を提供。HBO、PBS、NHK、ZDF、BBC、CBS、NBC、ABC、Discovery、National Geographic Channel、Nickelodeon などの仕事を通して世界中を旅している。

MRex 共同略歴

1990年代前半にそれぞれ渡米後、レイコとマックスはニューヨークのニュースクール・フォー・ソーシャル・リサーチ大学の大学院メディア学科でオルタナティブ・メディアを学んでいる時に知り合った。

レイコのライター、映像作家としての強みと、マックスのサウンド・映画音楽の洞察からの表現力を一体化させようと1994年にエムレックス・プロダクションズを設立、作品の共同制作を始めた。以来「メッセージと手法の融合」「人間間のコミュニケーション手段としてのメディアの力」を信条に制作が続いている。

年を重ねるにつれ二人の役割は拡張し交錯したりしながらも、彼らの多重層メディア工芸創作へのひたむきな情熱と新アメリカ移民の日本人としての視野は変わっておらず、映像、サウンド、そして物語エレメントの衝突と融合がエムレックスの核であることには変わらない。

現在、二人はブルックリン在住、11歳の娘と犬のミスター・ボボと一緒に暮らしている。

◆ フィルモグラフィー

『俺のおじはスパイだったのか』（仮題） 制作中、HD／カラー

2007年、父親他界後11年、母親他界後4年経った夏、マックスは故郷岡山の両親の家を片付けていた。そこで、ひょんなことから自分の父親が一般的には知られていないが実は「大東亜共栄圏」の父として専門家の間に知られる日本史上ナゾの思想家・大川周明が率いた“大川塾”の門下生として、かつて汎アジア主義運動に関わっていたかもしれないことを知る。大川塾の生き残りの人々の話を聞いていくうちに父の歩んだであろう知られざる軌跡、マックス自身が受けた戦後教育の中で教えられなかった「封印された史実」が見え始める...

『チルドレンズ・メッセージ・フォー・ピース』 制作中、カラー／30分／ウェブ

広島／長崎で被爆体験をした少年少女の手記をベースに、アメリカの同じ年頃の子供達に核爆弾を体験した広島の子供達の物語を語り継いでもらうプロジェクト。アメリカでの平和教育普及のために使ってほしい。軍縮教育者、国連軍縮問題事務所コンサルタント、キャサリン・サリバン博士協賛。ニューヨーク芸術財団公認、広島平和ピースグラント協賛作品

『円明院 ～ある95才の女僧によれば』 2008年 124分 （2007年に158分バージョン制作）、DV、クリエイティブ・ドキュメンタリー映画

岡山県玉野市にある真言宗寺院、円明院というお寺の95才の女性住職、小川貞純の生涯を探る探偵物語のドキュメンタリー。

資金協力：全米芸術基金、日米友好基金、ジェローム財団、ニューヨーク州芸術財団、アジア・アメリカンメディア協会、ブルックリン芸術財団。ニューヨーク芸術財団公認作品。

ハワイ国際映画祭、岡山映画祭、ニューヨーク・ヴィルチェック財団ギャラリーこけら落としイベント上映（3日間満員御礼）、ハワイ州タイムワナー・ケーブル特別オン・ダイヤモンド1か月無料放映。

『マーチ・オン・ワシントン・イン・ブルックリン』 2008年／11分 DV DVDプロジェクト

マーチン・ルーサー・キングJr.牧師のワシントン行進をブルックリンPS261小学校の高学年生たちが学校から区役所まで再現マーチした感動的な希望あふれるビデオ。父兄からの反響大で、以来、PTAがファンド・レイジングに使用し続けている。レイコの指揮でマックス他ボランティア保護者の撮影者が協力して撮影。

『プリンギング・リタラシー・フォー・ライフ』 2002年 30分／60分 DV ドキュメンタリー

バンク・ストリート・カレッジの奨学生ヴァシリア・カセンス先生が7週間にわたり行った年少クラスでの実験的ワークショップの模様を記録した作品。子供達のお気に入りの絵本が、民話の語り部、音楽、ダンスそして絵画の分野で活躍するアーティスト達を招いてのワークショップを通して、手作り芝居に姿を変えていく。

『シェフ加藤の家庭でもてなすフランス料理』 2000年／56分／DV／料理ビデオ
インターネットおよびニューヨークの日系書店、食料品店で販売した。読売アメリカで紹介。

『世界の家庭料理 in NY：ギリシャ編』 1999年／30分／DV

ニューヨーク移民の家庭料理を郷里の文化と移民物語と共に紹介したパイロット番組。

『リターニング』 1997年／20分／実験的フィクション・ストーリー脚本

ニューヨークを舞台にした近未来日本人移民物語。レイコ&マックス共同脚本。フィルム・ビデオ・アーツ主催のリア・タジリ監督とのアーティスト・メンターシップ・プログラムを通して書かれた作品。

『サウンド・オブ・リアリティ』 1996年／5-7分 x3／ラジオエッセイ

マックス制作。現代の音環境の中での‘聞く’ことと“聞こえる”ことについての疑問エッセイ。WBAI, NYにて繰り返し放送

『レムナンツ 残片』 1995年／11分／16mmフィルム／ドキュメンタリー

日本における西洋化と、自身と他者のイメージについてのレイコの私的考察ドキュメンタリー。テレビ・コマーシャルなどからの断片的画像と家族の画像、家族との会話を詩的に混ぜ合わせた実験映画作品

マーガレット・ミード 映画祭、サウス・バイ・サウスウエスト 映画祭、ニューヨーク・アジア・アメリカン映画祭、サンフランシスコ・アジア・アメリカン映画祭、ロサンゼルス・パシフィック・アメリカン・インター

ナショナル映画祭（国内ツアー選抜作品）、ウーマン・オブ・カラー映画祭、ウーマン・イン・ディレクターズ・
チェア映画祭（国内ツアー選抜作品）、レイント・シアター、シネマ・ビレッジ、アメリカン・フォトグラフィー・
インスティテュート、ジャパン・ソサエティ、ニューヨーク大学、ニュー・スクール大学、ボストン大学
テキサス公共放送局番組『テリトリー』で放映
ニュースクール大学R.G.ヤングソン金賞受賞（ベスト・フィルム1995）

『メディア・マージナリア』 1994年／58分／ドキュメンタリー／English日本語字幕
ニューヨーク自主制作メディア事情を日本のインディ制作者達に紹介。ビデオプレス配給。東京で上映。

『ミッドナイト・トレイン』 1993年／実験短編ビデオ
月を探す少女を描いたレイコの詩的エッセイ作品

◆ キャスト

小川貞純	円明院先住職（おじゅっさん、円明院さん）
馬場清純	円明院現住職、貞純の跡継者
岩崎増修	観音院名誉住職
馬場秀元	三宝院名誉住職、
筒井マサコ	貞純の妹
森本洋治	貞純のお気に入りタクシードライバー
馬場良子	清純の母
由良華子	レディー三井の孫、三井造船所玉野創始者・鶴飼宗平の娘
田原志保	着物の少女1（貞純の幼少時代）
タハラレイコ	映画制作者、高木増研の妻の声
上杉幸三マックス	映画制作者、観音院の声（アニメセクション）
上杉萌	レイコとマックスの娘、着物の少女2
尾関藤市	貞純の友達、大工
ローリー・ハイリス	レイコとマックスの友人、撮影協力者
宮本義秋	円明院檀家総代

檀家さん：半井純枝、中山志津江、当魔弥寿代、宮本光枝、高崎久子、山口和子、地下ヒロ子、山口鈴子、渚信行、高橋さおり

高野山専修学院生徒

竹内慈皓	前高野山尼僧学院寮監
坂田淳光	現高野山尼僧学院寮監
千葉麗弘	高野山尼僧学院副寮監

尼僧学院生徒

高木増堅	正蔵院住職（声のみ）
高木百合子	高木増堅の妻（声のみ）

ニューヨークの友達：エレニ・ベジャ、サイモン・チャウ、ビリー・グレゴリアデス、ヘザー・ウッド

奈良の大仏の観光客の人々・玉野市の人々・ニューヨークの人々

◆ 制作スタッフ

タハラレイコ	共同監督／脚本／編集／撮影／アニメーション／翻訳
上杉幸三マックス	共同監督／音楽／撮影／音声／サウンドデザイン／翻訳

ローリー・ハイリス	撮影協力
サイモン・チャウ	宣伝広告デザイン
エレニ・ベジャ	宣伝広告編集
デボラ・ハワード	英語コンサルタント
ビリー・グレゴリアデス	技術／機材協力
ベンツィ・ベバラシュビリ	ウェブサイト制作協力
ナニア・バエアー	制作資金調達コンサルタント

アドバイザー	
デオドラ・ポイル	ドキュメンタリー歴史家、評論家、大学教授
アラン・ベルリナー	映像作家“ワイド・アウェイク”（ベルリン、サンダンス映画祭、HBO）
ドン・クイン・ケリー	大学教授、歴史博士
ジミー・チョイ・カム・チェン	香港アートセンター、前ディレクター
出口景子	アドバイジング・エディター“ミリキタニの猫”（2006年トライベッカ映画祭オーディエンス賞）、 “イン・ザ・ドリーム”（2008年サウス・バイ・サウス・ウエスト映画祭オーディエンス賞）編集者

コンサルタント	
バーバラ・ルーシュ	コロンビア大学名誉教授、中世日本史研究所ディレクター